

関わり続ける定住のカタチの実践による
「結の故郷」づくりに向けた基礎的研究

令和4年3月

関西大学 社会資本計画研究室

目次

第1章 背景と目的	1
第2章 地域愛着に関わる言葉の定義と捉え方	2
第3章 本研究の位置づけ・検証する仮説	4
3.1 本研究の位置づけ	4
3.2 本研究の仮説	4
第4章 研究の方法	5
4.1 研究方法	5
4.2 アンケート概要	5
4.3 アンケートの質問内容	6
第5章 アンケート分析	9
5.1 アンケートの基本集計結果	9
5.2 「わたしが未来の市長プロジェクト」よっての地域愛着や地域資源とのかかわり方の比較	10
5.3 地域について考える度合いに応じて地域愛着や地域資源とのかかわり方	14
第6章 「わたしが未来の市長プロジェクト」で関わってきた経緯	16
6.1 「わたしが未来の市長プロジェクト」の概要	16
6.2 本年度の活動	16
6.3 「わたしが未来の市長プロジェクト」の活動や活動による役割や効果について	17
第7章 まとめ	19
7.1 本研究の結論	19
7.2 今後の方針	20
謝辞	21
参考文献	21

第1章 背景と目的

地方都市の人口減少および高齢化の深刻化、特に、若年層を中心とした人口流出問題に対して、長期的な視点から解決策を見出すことが重要となっている。総務省の打ち出す「定住自立圏構想」¹⁾のほか、各自治体では定住意識に重きを置いた市民意識に関して行った調査結果を総合計画に反映させる動きもみられ、特に、若者に対して定住意識を促進する重要性が高いことが認識されている。既存研究では、定住志向や地元回帰の要因として、実家があることや仕事環境を理由とした人がほとんどである一方、年齢層が高い人が主であるものの、地元の自然環境・居住環境に魅力を感じ、住み続けたい・地元に戻ってきたいと思うという結果もあることから^{2,3)}、若者においても、定住意識を高めるために、若年層にふさわしい地域への強い思いを持ってもらうことも重要になると考えられる。また、関係人口や交流人口等のキーワードの必要性や外部人材の重要性も叫ばれている。本研究の対象となる福井県大野市においても、「大野へかえろうプロジェクト」のように、いずれは帰ってきてもらいたい、地元もしくは外部から地域を支えてほしいという、市民の期待が見られる。

これらのことから、定住・離脱前の大きな転機となる高校生には、卒業した後も地域との関わりを強めるために、高校生にとって効果的な地域に存在する地域資源との触れ合いなどの中で、高校生が地域や地元の人等への想い「地域愛着」を高め、住み続けたいなどの定住意識を醸成させることも一つ重要となると考える。そのためにも、定住・離脱する転機となる若者「高校生」までには、「地域愛着」を醸成し、「定住意識」を高めてもらうことが必要なことが考えられるため、高校生にアプローチをする。

この背景から読み取れる課題に対して、本研究では地元から定住・離脱する前の高校生にとって、今後の地域との関わりを強めてもらうために、高校生の地域愛着の醸成において生活環境に応じたより効果的な方法を検討することを目的として、上記の課題に応えることとする。

第2章 地域愛着に関わる言葉の定義と捉え方

本研究におけるいくつかのキーワードの定義と捉え方について、あらかじめ整理しておく。

・地域愛着

Hidalgo et al⁴⁾が定義しているものを踏まえ、「地域愛着」を「人と特定の地域をつなぐ感情的な絆や結びつきであり、心地よいものとして感じられるもの」と定義する。また、これまでの研究を参考に、地域愛着の尺度として、それぞれ地域愛着(選好)・地域愛着(感情)・地域愛着(持続願望)と言い換えて用いる。地域愛着(選好)は個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度を意味するものであり、地域愛着(感情)は、そうした嗜好を超えて当該地域に対して、慣れ親しんだものに深く惹かれ、離れ難く感じる程度を意味するものとする。地域愛着(持続願望)とは、嗜好や感情といった現状の地域に対する認知的、情緒的な地域への心的関与のみを意味するのではなく、地域のあり方そのものに対して“願い”を抱くという地域愛着を意味するものとする。

また、ここでいう「地域」の定義として、行政政策の基本的な範囲である基礎自治体範囲の地域とする。

・定住意識

武ら^{5), 6)}の研究から「定住」の狭義として、同一場所に物理的に永年にわたって住み続けること、あるいは満足して愛着性や連帯性を持ちつつ、短くないある一定の期間に継続して住むこと。人は環境に対して、①定住したい、②移動(移住)したい、③住み良く(するため改善)したいという対応の仕方があり、①は「住居」及び「周辺領域」である「地域」に対して満足感を持ち、半永久的に「定住」しようとする意思を持った状態と挙げている。この武らの既存研究の定住意識に対する定義に加え、本研究では移住したとしても、地域イベントには参加する、市が災害にあったら支援したい等、地域との外部からの関わりの意識も含める。つまり、行政政策の基本的な範囲である基礎自治体と定義する「地域」すなわち大野市に対して、定住意識を広義の意味として、満足感を持ち、半永久的に「定住」や「外部からの関係」を持ちつづけようとする意思と定義づける。そこで、この定義をもとに定住意識を定住意識(定住)と定住意識(外部関係)として、本研究では研究を進める。

・地域愛着

「地域愛着」の規定要因について、年齢や居住年数の他にも周辺環境や近隣住民との接触が地域愛着に影響を及ぼすと指摘されている。澤本の研究からも地域資源との接触は地域愛着を醸成することにつながると指摘されている⁷⁾。図1に示すように、地域愛着については風土への接触量が大きくなるほど、比較的短期間で地域愛着(選好)が有意に高くなるものの、地域愛着(感情)や地域愛着(持続感情)は有意に変化にはしなかったとされる。しかしながら、比較的短時間に変化する地域愛着(選好)が、より長期的に変化するであろう地域愛着(感情)や地域愛着(持続願望)に影響を及ぼす可能性があるという報告もあり、これらの関係を意識して研究を進めることとする。

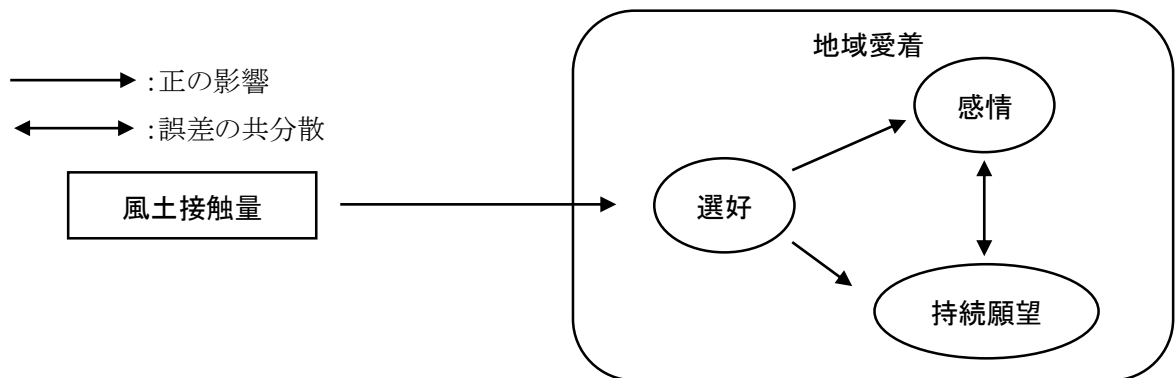
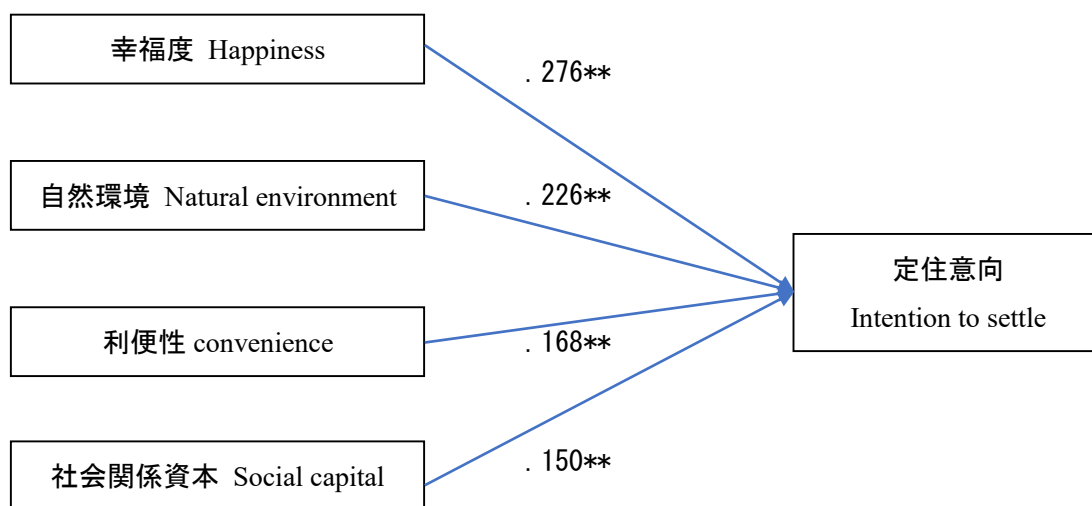


図1 風土との接触量の変化と地域への感情の関係についての仮説

・定住意識の捉え方

「定住意識」に関して、今後も住みたいという人や地元回帰をする人の要因として、進学先や就職先があるかどうかという進路環境や、地元回帰に関しては、実家があるからという要因が大半を占めている。しかし、自然環境や居住環境等の「地元やそこに関わる人への想い」というのも、一つの要因として結果が出ている^{9, 10}。また、図2に示すように、菊澤ら¹¹⁾では、自然環境、利便性、社会関係資本が定住意向の規定する要因であるとされている。ただし、それらの変数以上に「幸福度」というものが、定住意向に最も影響を与えていることが示唆されている。さらに、その「幸福度」は、健康、仕事への満足度、市民活動への参加意欲によって規定されていることがわかったことから、それらの変数が「幸福度」を介して間接的に定住意向を規定するということがいえる。



注: 矢印上の数値は、影響度合いを表す係数で、数値が大きいほど影響が大きい。また、いずれの係数も、統計検定をしており、5%水準で有意であると確かめられている。

図2 定住意向に与える規定要因¹¹⁾

第3章 本研究の位置づけ・検証する仮説

3.1 本研究の位置づけ

「地域愛着」は、地域の活動に対して協力行動を促すことなどの地域とのかかわりを高めるために効果的であるとされる。したがって、「定住意識」も同じように「地域愛着」が醸成されれば、今後の地域との関係性を強める一つとして、地域に対して「住みたい」や「関わり続けたい」といった意思、外部に出たとしても関わり続けたいという意思を醸成することができるのではないかと解釈できる。ただ「定住意識」との繋がりに関しては、地域やそこに関わる人々への思いというのも規定要因として挙げられている中で、「地域愛着」という指標から高校生の「定住意識」を醸成することが本当にできるのか、その繋がりを示したデータが少ない。

また、高校生の定住意識を高めるであろう「地域愛着」を醸成するために、地域資源に触れることや市民活動の活性化が必要になることや、年代、居住年数等について書かれた既存研究や報告書は存在しても、高校生に着目した「地域愛着」の醸成するための規定要因を示した研究も少なく、効果的な地域資源の触れ合い方でそれらを醸成できるのかを示された研究は少ない。地域資源の醸成において生活環境に応じた効果的な方法を示している研究も少ない。

3.2 本研究の仮説

これまでの研究では、福井県立大野高等学校の当時高校2年生を対象としてアンケートの分析をして、若者(高校生)の地域愛着や定住意識について研究を行っている。また、本研究では現高校1年生を対象にアンケート分析などを行い、地域愛着や定住意識について研究を行っている。そこで、大野市のことについて深く考えるきっかけになる総合学習の一環である「わたしが未来の市長プロジェクト」の授業を終えて、また最中での高校生の意識の差や学年によって大野に対しての想いの変化があるのではないかと考えられる。

仮説①: 地域資源接触の度合いや地域愛着は「わたしが未来の市長プロジェクト」からの影響の直接性によって異なる。

また、地域について深く考えている高校生ほど地域愛着が高いのではないかと考えられる。また、地域資源とのかかわりが高くなるのではないかと考えられる。

仮説②: 地域について考える度合いに応じて地域愛着や地域資源とのかかわり方が異なる。

さらに、一方的に聞くアンケートと対話の中で聞くヒアリングでは異なる回答が得られるのではないかと考えられる。

仮説③: 学生に対して一方的に聞く(アンケート)より対話の中で聞く(ヒアリング)の方が、地域魅力の理由を知ることができる

第4章 研究の方法

4.1 研究方法

高校生を対象としたアンケート調査を行った。アンケート用紙を担当の先生宛てと学生向けの説明書を添えて、福井県立大野高等学校に郵送した。担任の先生からアンケートを配布してもらい、宿題として持って帰って回答してもらうか、もしくは、学校の時間の中で回答してもらう方法でアンケートを実施した。その結果分析は、現段階の状況を把握するためやこれまでの研究結果と比較するために、現在考えられる住む予定及び定住意識(定住/外部関係)、地域資源との関わりの単純集計を行った。

さらに、「わたしが未来の市長プロジェクト」の効果や大学生の役割について考察した。大野高等学校の1年生の総合学習の一環である「わたしが未来の市長プロジェクト」の授業に参加し、大野の課題などを考え、その考えた課題を解決することができるような計画を立て、大野市長に計画を提案する。大学生が高校生に関わることで地域愛着醸成への影響や大学生の役割はどういったことがあるのか考察する。高校教育の側面を持つことは確かではあるが、そこに地域愛着醸成という視点から分析を試みた。

4.2 アンケート概要

調査項目として、①基本項目、②定住意識に関して、③地域愛着について、④高校生が想う地域愛着について、⑤「わたしが未来の市長プロジェクトについて」の5つに大きく質問項目を分類し、アンケート原案を作成した。各項目の調査内容を以下にまとめる。

①基本項目

回答者の基本的なデータを集めるために、クラス/お住まいの町目について回答を求めた。

②定住意識に関して

現段階での高校卒業後の住む予定の場所を聞き、現状を理解したうえで、地域資源接触と若者の地域愛着と定住意識の関係性を分析するために、高校卒業後や大学・短大・専門学校等卒業後も地元に住み続けたいか、最も合うもの一つを選んでもらい、定住意識に関する質問を設けた。また、本研究の定住意識の定義として「外部関係」を用いている。地域イベントには参加したい、市から何か頼まれると手伝いたい、市が災害にあったら支援したいなど、外部に出たとしても関係を持ちつづけたいかな否かも含めるため、「とてもそう思う」、「そう思う」、「どちらでもない」、「そう思わない」、「全然そう思わない」の5段階で外部からの関係をもち続けたいか回答を求めた。

③地域愛着について

大野市の高校生が大野市に対して、どれだけ地域愛着があるのか。また地域愛着が高校生の定住意識の醸成につながるのか、そして地域愛着を醸成するための効果的な地域資源の触れ合い方を明確にするために、既存研究の質問項目を使用する。ただ、地域愛着(感情)にある、「ずっと住み続けたい」という項目は、本研究の「定住意識」の定義から、②の「定住意識に関して」の質問項目に含めているので、③の質問項目から除くことにした。本研究では「地域愛着」を3要素に

分類し、「とてもそう思う」から「全然そう思わない」の 5 段階での回答を求めた。

④ 高校生が思う地域愛着について

地域愛着、そして定住意識が醸成される効果的な地域資源接触があるのか、高校生の生活環境などによって違いがあるのか既存研究と比較するため、その質問項目を使用し、まず、大野市にある地域資源を「建造物」、「自然」、「コミュニティ」の 3 種類に分類し、それぞれ分野において代表的なものを挙げ、回答者にとって最もかかわりのあるものを回答してもらった。その後高校生が思う地域資源について回答してもらった。

次に、その地域資源との接触のシチュエーションを高校生ならではの場面に変えて、「友達とよく遊んだ思い出のある場所である」のように「学生生活」で関わる場合、「家族や近所の人とよくその資源の話をする」のように「日常生活」で関わる場合、「学校等で学ぶことはその地域資源に対して考えるいい機会である」のような「地域教育」で関わる場合、最後に「この地域資源に関するイベントによく参加する」のような「イベント」の中で関わる場合の 4 つのパターンに分類し、これらの質問に対して、「とてもそう思う」から「全然そう思わない」の 5 段階での回答を求めた。

⑤ 「わたしが未来の市長プロジェクト」について

大野高校生が実際に「わたしが未来の市長プロジェクト」の授業を行っていて、その中で高校生の意識の変化はあったのか。また、今回は「わたしが未来の市長プロジェクト」での提案について（自分たちが考えた計画が市長に届くことがうれしい）、高校生の意識（「わたしが未来の市長プロジェクト」を行うことは楽しい）、効果（大野市のことについて考えるきっかけになった）の 3 つに分類し、これらの質問に対して、「とてもそう思う」から「全然そう思わない」の 5 段階での回答を求めた。

4.3 アンケートの質問内容

「②定住意識に関して」の質問内容

1-1) 高校卒業後の現段階の住む予定の場所について

（大野市内に住む/大野市外の福井県内に住む/福井県外の北陸地方に住む/それ以外の地域に住む(関西・関東等)）の中で、該当するもの 1 つ回答してもらおう。

1-2) 進学先や就職先等は考えないうえで、高校卒業後や大学・短大・専門学校等を卒業後も、大野市に住みたいと思うかについて

（大野市内に住みたい/何年か市外に住んだら、その後大野市に住みたい/福井県内のどこかで住みたい/福井県外のどこかで住みたい）の中で、該当するもの 1 つ回答してもらおう。

1-3) 1-2)の質問で、一時的にもしくは外部に出たいと回答した人で、大野市外に住んでいる間も大野市と関わり続けたいと思うか(地域イベントには参加したい・市から何か頼まれると手伝いたい・市が災害にあったら支援したい等)について

（とてもそう思う/そう思う/どちらでもない/そう思わない/全然そう思わない）で、該当するもの 1 つに回答してもらおう。

「③地域愛着について」の質問内容

1-1)地域愛着について

地域愛着(選好) :大野市が好きだ/雰囲気や土地柄が気に入っている/大野市が好きだ/リラックスできる/

地域愛着(感情) :愛着を感じている/自分の“まち”だという感じがする/ずっと住み続けたい/

地域愛着(持続願望):いつまでも変わってほしくないものがある/無くなってしまうと悲しいものがある/遠くにいても大野市に貢献したい

(とてもそう思う/そう思う/どちらでもない/そう思わない/全然そう思わない)で、該当するもの1つ回答してもらう。

「④高校生が想う地域資源について」の質問内容

1-1)以下の自然、建造物、イベントの地域資源「星空・大野城・城下町キャラバン・おおの城まつり・その他」のうち、最も特別である・大切にしていきたいと感じるもの1つ回答してもらう。その他を選んだ高校生には具体的な自然、建造物、イベントの地域資源を1つ記入してもらう。

1-2) 1-1)で回答してもらったものも含めて高校生が想う“大野の魅力”については具体的なものを自由に記入してもらう。

1-3)1-1, 1-2)で選んだものや書き込んだ地域資源との関わりについて

「学生生活」の中での関わり:友人とよく遊んだ思い出のある場所である/学校行事や課外活動で訪れたことがある(遠足など)

「日常生活」の中での関わり:家族や近所の人とよくその資源の話をする/観光客やマスコミ、ネット等で良い評判を聞くと嬉しく思う

「地域教育」の中での関わり:学校等で学ぶことはその地域資源に対して考えるいい機会となる/学校以外で資源について考える機会があった/市にこの地域資源があることを誇りに思う

「イベント」の中での関わり:この地域資源に関わるイベントによく参加する/この地域資源に関わるイベントに積極的に参加したいと思う/この地域資源を守っていく活動への協力は厭わない

(とてもそう思う/そう思う/どちらでもない/そう思わない/全然そう思わない)で、該当するもの1つ回答してもらう。

「わたしが未来の市長プロジェクト」についての質問内容

1-1)「わたしが未来の市長プロジェクト」について

「わたしが未来の市長プロジェクト」での提案について:

自分たちが考えた計画が市長に届くことがうれしい/自分たちが考えた計画が実現したらうれしい

「わたしが未来の市長プロジェクト」の高校生の意識:

「わたしが未来の市長プロジェクト」を行うことは楽しい/来年も続けて「わたしが未来の市長プロジェクト」を行いたい/

「わたしが未来の市長プロジェクト」の効果:

大野市のことについて考えるきっかけになった/“大野への想い”がこれまで以上に大きくなった/
“大野の魅力”が増えた/

(とてもそう思う/そう思う/どちらでもない/そう思わない/全然そう思わない)で、該当するもの1つ回答してもらおう。

第5章 アンケート分析

5.1 アンケートの基本集計結果

5.1.1 アンケート概要

大野高等学校の大野出身の高校1年生を対象として、郵送配布・回収によるアンケート調査を行った。表1に示すように、調査期間は2021年12月15日から2021年12月16日とし、総配布数は115通であった。結果、サンプル数は115であり回答率は100%であった。また、有効回答数は109もの数があり、有効回答率は94%と高い回収率とすることができた。

表1 アンケート概要

研究対象	福井県立大野高等学校の大野市出身の高校1年生
実施期間	2021年12月15日～2021年12月16日
総配布数	115
サンプル数	115(回答率100.00%)
有効回答数	109(有効回答率94.78%)

5.1.2 現段階の住む予定の集計結果

本研究の仮説を検証する前に、現段階における高校卒業後の住む予定を把握し、属性を確認するために集計を行った。その結果が図3である。大野高等学校生の現状としては、大野市内に住む予定の人は33%である。また、大野市外に出る予定の人が過半数(67%)を占めていることから例年通り大野市においては、多くの高校生が大野市を離れる予定であることが分かった。

また、定住とのクロス集計結果を図4に示す。この結果から、①大野市に住む予定の人は「大野市に住みたい」と感じており、定住意識が少なからず影響していることが分かる。②それ以外の地域に住む予定の人のなかで、「大野市に住みたい」と感じている人は12%と少ないことが分かる。①のような高校生が増えていくことや②のような高校生を「大野市に住みたい」や「何年か市外に住んだら、そのあとは大野市に住みたい」へ意識が変わり増えてくれることが望まれる。

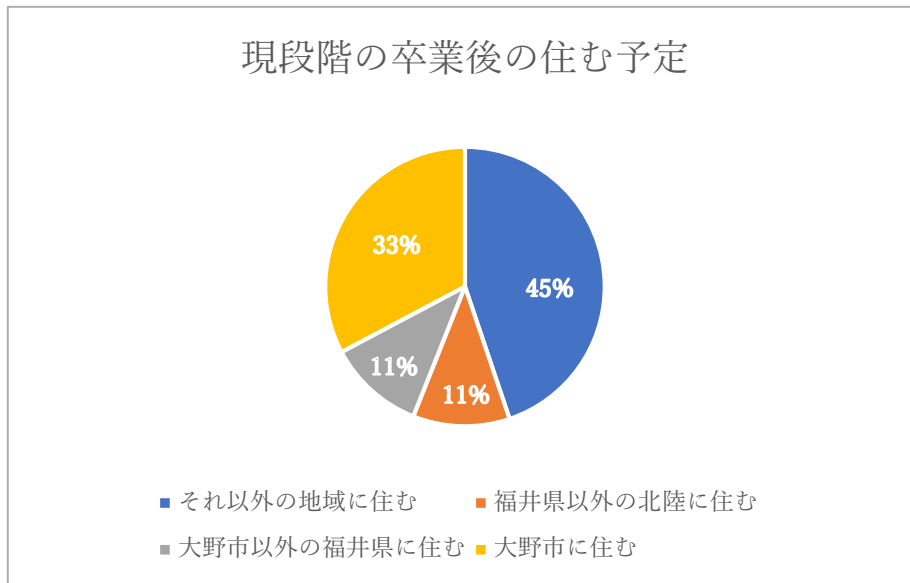


図3 現段階の卒業後の住む予定

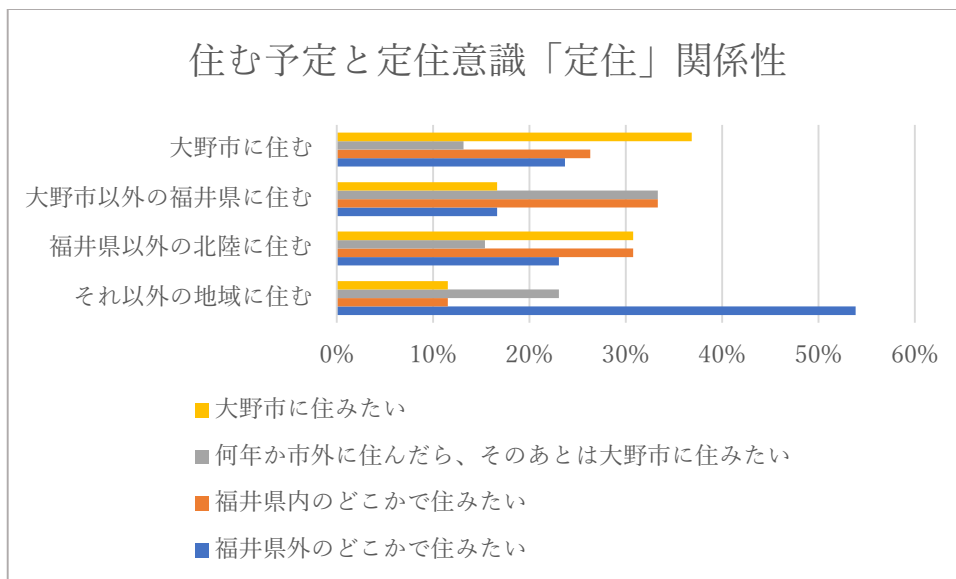


図4 住む予定と定住意識「定住」関係性

5.2 「わたしが未来の市長プロジェクト」によつての地域愛着や地域資源とのかかわり方の比較

「わたしが未来の市長プロジェクト」によつての地域愛着や地域資源とのかかわり方について変化がある、という仮説を検証するために昨年度の澤本の研究と比較を行った。

「わたしが未来の市長プロジェクト」を終えて1年たった当時高校2年生と現在行っている最中である高校1年生を比較した。

5. 2. 1 地域資源とのかかわり方比較

当時高校2年生である現在の高校3年生と高校1年生の地域資源との接触の仕方について比較した。その結果が図5である。縦軸は、5件法で尋ねたものにそれぞれ1～5点の点数を与え、その集計値を地域愛着度合いとした数値である。学生生活での接触量では、現在高校3年生と1年生の間では、1.33と大きな差が出た。この理由としては、現在高校1年生は「わたしが未来の市長プロジェクト」という地域資源との接触が多い授業があることからこれが原因で学生生活での接触量が高くなったと考えられる。また、現在の高校3年生は当時高校2年生ということもあり、高校1年生とは違って、授業では地域資源と接触する機会が少ないことが原因の1つである可能性があると考えられる。また、他の3つの接触機会では各学年間では差があまり見られなかった。イベントが全体的に地域資源との接触が少ないのは、コロナ禍の影響がある可能性があると考えられる。

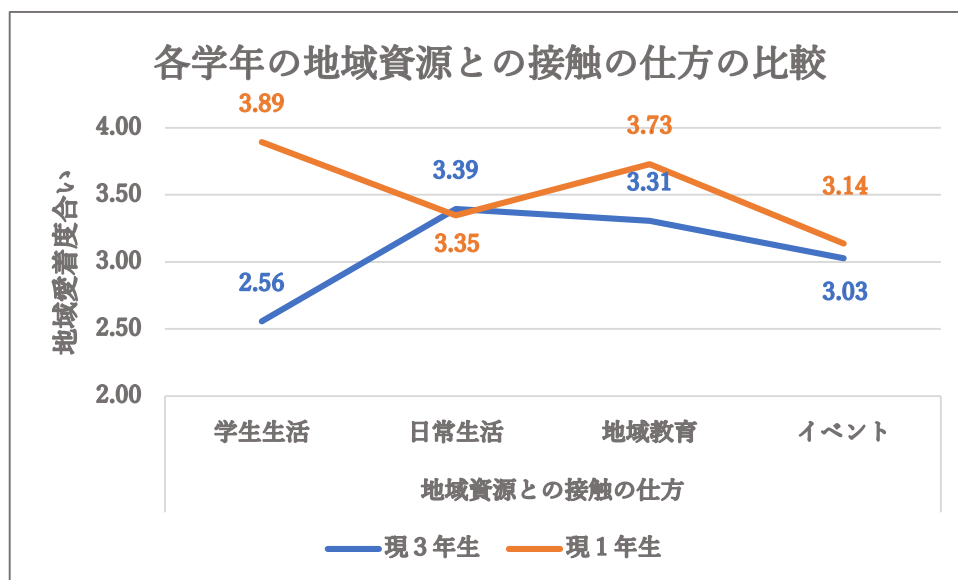


図5 各学年の地域資源との接触の仕方の比較

現在3年生と現在1年生の間に有意な差が見られるか確認するためt検定を行った。これは、今回のアンケート結果の差が、統計的に見ても差があるといえるかどうかを確かめるものである。この結果、0.05以下であればよいとされるP値が0.0022となり、有意に差があることが確認された。また、その他の接触の仕方も学生生活と同様にt検定を行った。その結果は表2である。この結果、学生生活と地域教育において、差が確認された。

表2 検定結果

検定	地域資源との接触の仕方			
	学生生活	日常生活	地域教育	イベント
F検定	0.04	0.47	0.33	0.32
t検定	1.96E-05	0.15	0.01	0.69

5.2.2 地域愛着比較

当時高校2年生である現在の高校3年生と高校1年生の地域愛着について比較した。その結果が図6である。現在の3年生は3つの地域愛着間では差があまりない。現1年生は選好と感情の間では0.45(=4.21-3.76)の差が出た。また、各学年の地域資源との接触と地域愛着の関係を比較したのが図7, 8である。地域愛着について比較したときと同様に、現在の3年生は3つの地域愛着間では差があまりなく、現在の1年生は選好と感情の間では、0.4~0.5(=4.34-3.93, 3.55-3.05)の差がでた。また、地域資源接触が多い場合や少ない場合でも現在の1年生の方が現在の3年生と比べて選好が多いことが分かる。この結果、「わたしが未来の市長プロジェクト」は、選好に大きな影響を与えることから、地域愛着醸成のはじめの段階において効果的であることが分かる。一方で、感情や持続願望には直接的につながっていないことから、これらを高くしていくには地域資源との接触を高校2, 3年生の時でも増やしていけるような継続的な取組が必要であると考えられる。

また、これらの分析にも、同様に検定を行っており、P値が0.0005となり、有意に差があることが確認された。また、学年ごとのその他の接触の仕方についても同様に行った検定の結果は表3であり、選考のみに差が確認された。

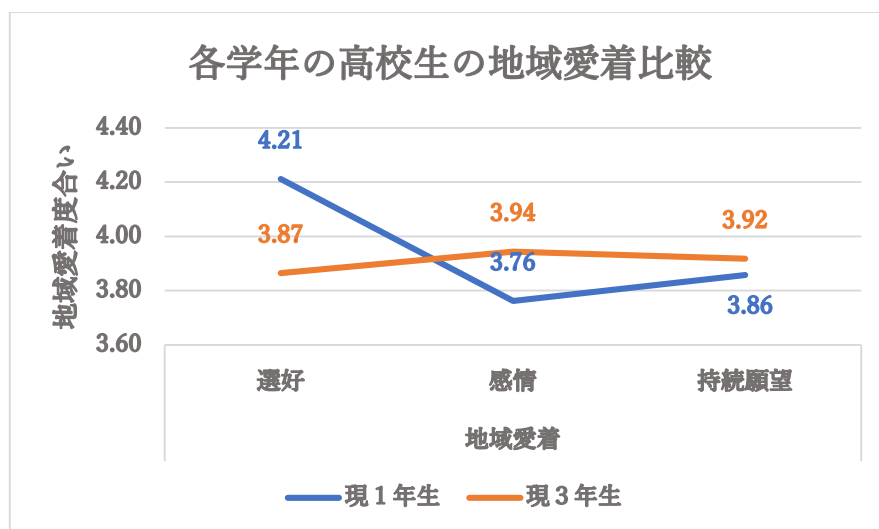


図6 各学年の地域愛着比較

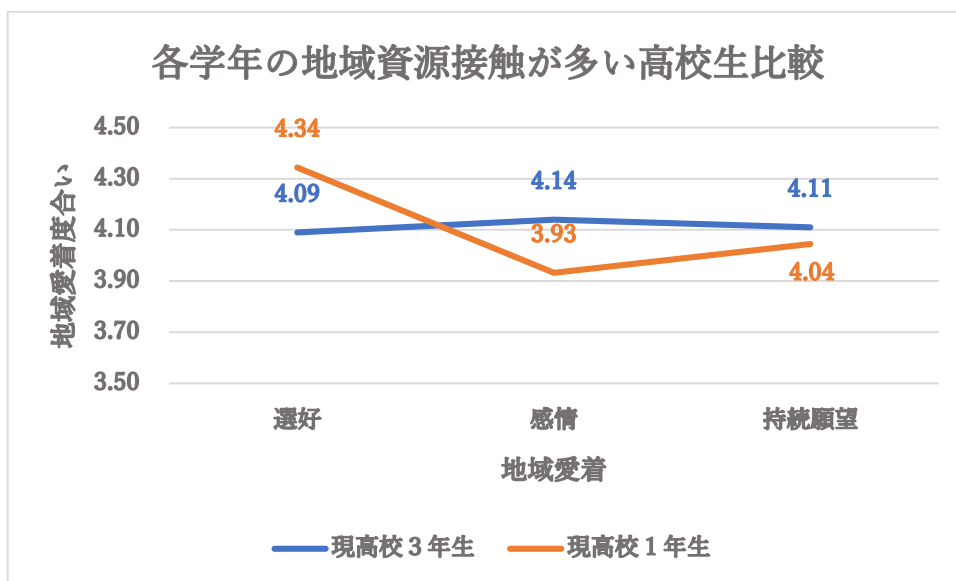


図7 各学年の地域資源接触が多い高校生比較

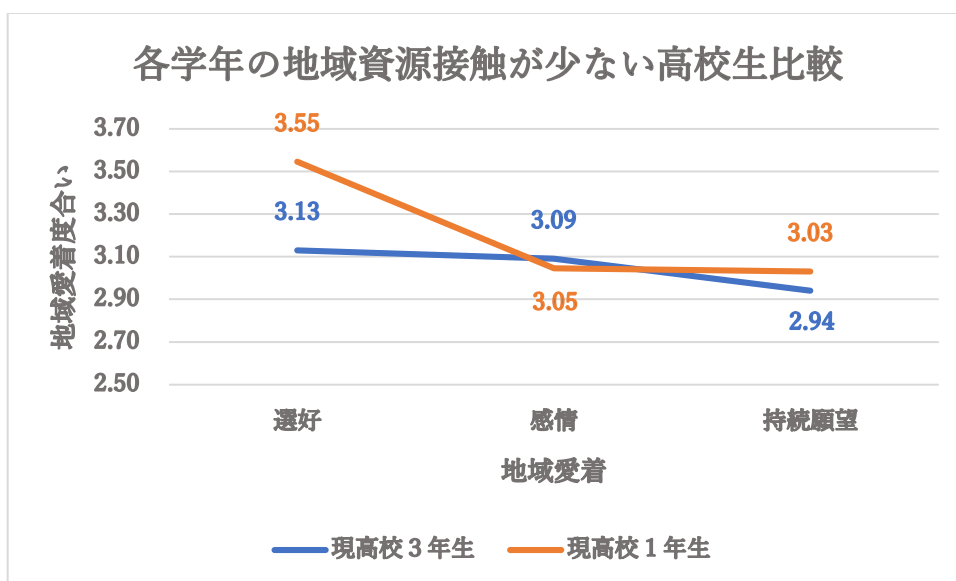


図8 各学年の地域資源接触が少ない比較

表3 検定結果

検定	地域愛着		
	選考	感情	持続願望
F検定	0.09	0.44	0.04
t検定	4.12E-04	0.07	0.60

5.3 地域について考える度合いに応じて地域愛着や地域資源とのかかわり方

「地域について考える度合いに応じて地域愛着や地域資源とのかかわり方が異なる。」という仮説を検証するために分析を行った。

5.3.1 地域についての度合いによる地域愛着

凡例は、今年度の高校生アンケートの「わたしが未来の市長プロジェクト」に関する質問項目の1つである「大野市のことについて考えるきっかけになった」という質問についてである。質問の回答としては「とてもそう思う」～「全然そう思わない」の5件法を用いている。しかし、今回は、回答状況に基づき、「とてもそう思う」、「そう思う」、「どちらでもない」の3つに分け、分析を行った。

地域についての度合いによる地域愛着についての結果は図9である。それぞれの地域について考える度合いでの3つの地域愛着間ではあまり差が出なかったが、地域について考える度合いが大きい人と少ない人とでは1.00程度の差が出た。地域について考える度合いが大きい人の方が少ない人より地域愛着が高いことが分かる。

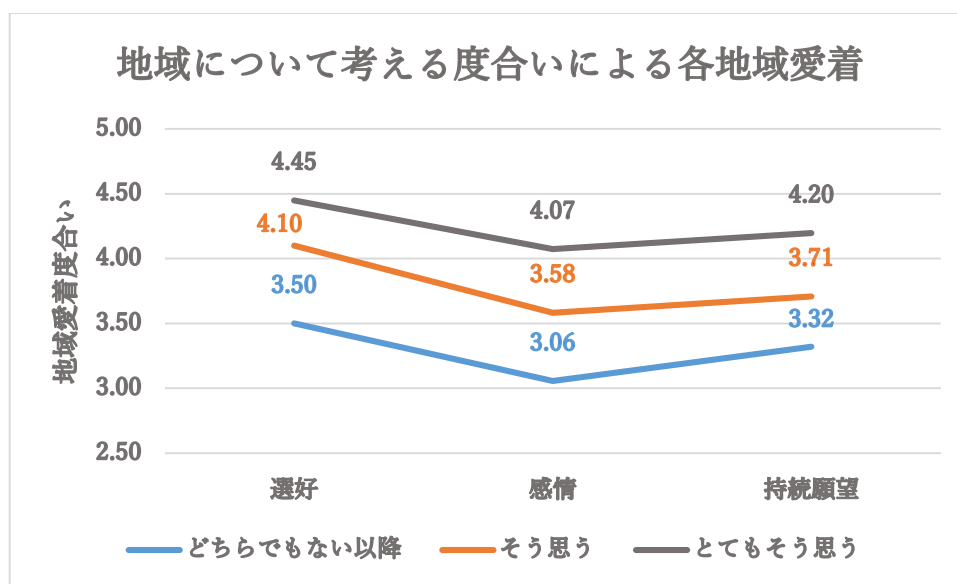


図9 地域について考える度合いによる各地域愛着

5.3.2 地域についての度合いによる地域資源接触

5.3.1と同様、凡例は、今年度の高校生アンケートの「わたしが未来の市長プロジェクト」に関する質問項目の1つである「大野市のことについて考えるきっかけになった」という質問である。質問の回答としては「とてもそう思う」～「全然そう思わない」の5件法を用い、「とてもそう思う」、「そう思う」、「どちらでもない」の3つに分け、分析を行った。

地域についての度合いによる接触の仕方についての結果は図10である。それぞれの地域について考える度合いでの4つの地域資源との接触の仕方間ではあまり差が出なかったが、「そう思う」と答えた中でイベントでの接触が低くなった。地域について考える度合いが大きい人と少ない人と

では 1.00 程度の差が出た。地域について考える度合いが大きい人の方が少ない人より接触度合いが高いことが分かる。また、地域について考える度合いとは関係なく学生生活と地域教育で地域資源と接触している高校生が多いことが分かる。イベントでの接触が一番少ない。

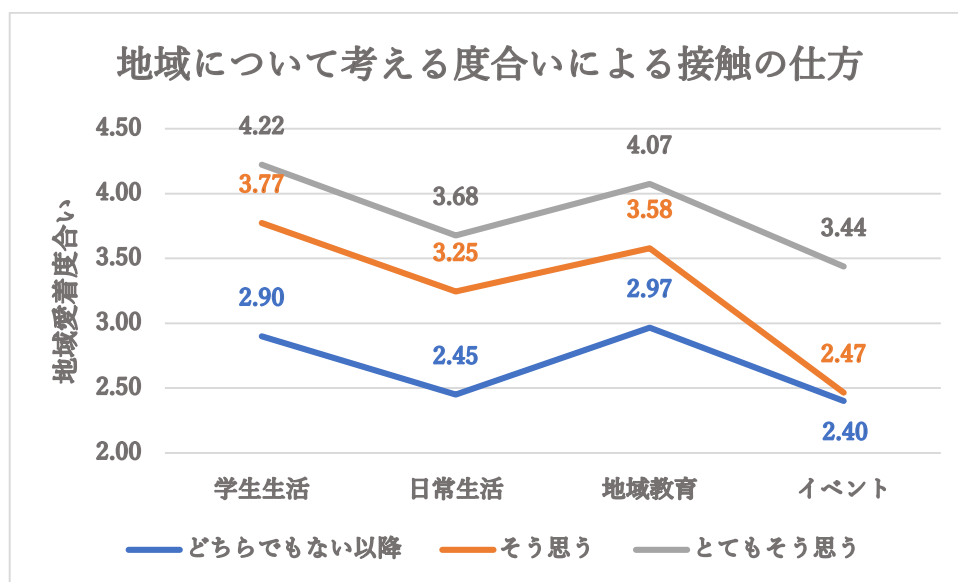


図 10 地域について考える度合いによる接触の仕方

これらの分析により、地域について考える度合いが高い人は地域資源との接触量や地域愛着が高いことが分かる。地域愛着を醸成するにあたって、地域について考えるきっかけづくりが重要であると考えられる。

第6章 「わたしが未来の市長プロジェクト」で関わってきた経緯

6.1 「わたしが未来の市長プロジェクト」の概要

「わたしが未来の市長プロジェクト」という授業は、2017年から始めて本年度で5回目の実施である。各クラスにそれぞれ大まかなテーマ(本年度はこども・健福祉、地域経済、くらし環境、地域づくり)が与えられ、そのテーマに沿って具体的な計画を考え、学内発表などを行い、選ばれた5班程度の班が最終的に大野市長などの前で提案を発表してもらい、市の施策の参考にする。また、最優秀賞などのいくつか賞があり、主にこの賞を参考に翌年度に向けて事業を行う。このプロジェクトによって、高校生のまちづくりの探究活動を市が支援しながら、若者(高校生)の郷土への愛着を促すなどの目的がある。

6.2 本年度の活動

6.2.1 事業内容

若者の郷土への愛着を促すため、高校生のまちづくりの探究活動を市が支援しながら、最終的に提案を発表してもらい、市の施策の参考にする。また、今年度から「わたしが未来の市長プロジェクト」の賞の中に、横町スタジオ賞を作った。選定基準として、翌年度に若者(高校生を含む)と一緒に地域づくり活動を行うことができるような提案であること、とした。横町スタジオを拠点に年間を通して事業を進めていく予定である。

6.2.2 運営方法

- ・大野高等学校1学年の生徒を対象に実施。(A～D組の全クラス・全123人)
- ・生徒は、週1回の「総合学習」の時間に本プロジェクトに係る探究活動を実施。(11/8, 15, 22, 29, 1/31, 2/12, 計6回授業に参加した。)
- ・各クラス6～7班に分かれ、班ごとに提案を考える。(全26グループ・1班あたり4～5人で構成)
- ・クラスごとにクラステーマが設定され、異なる分野から提案を検討。

6.2.3 クラステーマ

第六次大野市総合計画の基本目標の分野(こども・健福祉、地域経済、くらし環境、地域づくり)を各クラスの「クラステーマ」に設定した。

地域経済(1年A組) : 歴史・風土と新たな強みを生かした活力あるまち。農業、林業、商工業、観光業、働く環境。

こども・健福祉(1年B組) : 未来を拓く大野っ子が健やかに育つまち。健幸で自分らしく暮らせるまち。子育て、学び、健康・医療、地域福祉、スポーツ。

くらし環境(1年C組) : 豊かな自然の中で快適に暮らせるまち。自然環境・ごみ、水環境、生活環境、消防・減災、道路、公共交通。

地域づくり(1年D組) : みんなでつながり地域が生き生きと輝くまち。ひと・地域、防災力・防犯力、文化芸術、移住定住。

6.3 「わたしが未来の市長プロジェクト」の活動や活動による役割や効果について

「わたしが未来の市長プロジェクト」の授業中に各班で作業を行っている高校生にヒアリングを行った。これは、「アンケート分析内容とヒアリング内容では違いがある。」という仮説を検証するために行ったものである。また、ヒアリングによって明らかになったことから、今後の方針への提案内容も検討した。以下に記載しているようにいくつかの質問内容や回答が得られた。

6.3.1 ヒアリングによって得られた質問内容と回答

- Q1. 御清水など数ある資源の中からはなぜ大野城を選択したか。
A1. 有名だから。よく目にするから。歴史のある建物だから。
Q2. 大野の魅力はどういうところですか。
A2. 自然が美しい。水がおいしい。街並み。星空がきれい。自然に囲まれている。
Q3. 市長PJは楽しいですか。どのような所を感じるか。
A3. 楽しい。友達と話せる。知識がつく(大野の知らなかったことについて知ることができる。キャリアウォータープロジェクトなど)。
Q4. 空き家をハロウィンやクリスマスパーティなどのイベント会場にしようと思ったのはなぜか。
A4. 楽しそう。やってみたい。人が集まりそう。
Q5. ターゲットを親子にしたのか。(D組4班)
A5. 親子の方が集まりそう。
Q6. 大野の偉人を用いた絵本を作り、大野の歴史を知ってもらおう。という提案になぜしたのか。また、絵本をオーダーメイドにするや浴衣で記念写真を撮影して絵本に折り込もうとしたのか。(D組4班)
A6. 大野の歴史について知らない人が多く、知ってもらいたい。思い出に残ると思ったから。
Q7. 廃校の活用方法では、レストランやカフェ、グランピングなどがあるがなぜアドベンチャー施設にしたのか。
A7. 子供をターゲットにしたから。

6.3.2 各質問から高校生の特徴

Q1, A1

大野には御清水などといった数ある資源がある中なぜ大野城に着目したのかを質問した。高校生の回答としては「よく目にするから」や「歴史ある建物だから」というような市長に提案するうえで1番大事だと思ったものが歴史的もしくは、シンボル性のあるもの、多くの人々が想う地域資源に目を向けたことが分かる。

Q2, A2

「わたしが未来の市長プロジェクト」のような地域について考えている中で、高校生が想う大野の魅力について質問した。高校生の回答としては「自然が美しい」や「星空がきれい」というような風景に目を向けていることが分かる。また、自然の美しさが魅力と感じており、大野の誇れるものの1つ

であると考えていることが分かる。

Q3, A3, Q4, A4

大野の課題を見つけ、その改善策を大野市長に提案する「わたしが未来の市長プロジェクト」の授業は楽しいのか、また、どのような時に楽しいと思うのか質問した。高校生の回答としては「友達と話せる」や「知識がつく」などといった高校生が楽しいと思えることについての回答がわかる。また、コミュニケーションが取れるうれしさや知的的好奇心があることが分かる。コミュニケーションが取れるような場所や知識を得られるまたは考えることができるような場所が高校生は欲しいと感じていることが分かる。

Q5, A5, Q7, A7

ターゲットを親子にした理由などの具体的な提案内容について質問した。高校生の回答としては「親子の方が集まりそう」などといった市長に提案するうえでターゲットを明確に決め、計画を練っていることが分かる。また、大野に来訪してもらうための集客方法などを考えており、大野を活性化していくために何が必要かをよく考えている。親子や子供をターゲットにしていることから、大野で住むためには子供を安全に遊ばせることや興味が持ちそうなものを計画に盛り込むことが大事だと考えていることが分かる。

Q6, A6

歴史に着目したもののQ1とは差異があり、偉人に着目した理由や記念撮影したものをなぜ絵本にするか質問した。高校生の回答としては「大野の歴史について知らない人が多く、知ってもらいたい」や「思い出に残ると思ったから」というような市長に提案するうえで、大野のことについて知ってもらうことで大野を宣伝し、歴史面での大野の魅力を伝えると同時に写真撮影したものを絵本に残すことで来客してくれた人に思い出を残すと考えていることが分かる。また、Q1と同様に数ある地域資源の中から歴史の面に着目している。しかし、Q1とは違って目につくものではなく偉人などに着目している。また、思い出に残るものを作りたいということや形に残るものを作りたいと思っ

6.3.3 まとめ

Q1, 2, 6 から、実際に目につくものや偉人に関するものなどの歴史に興味があるがそれ以上に大野の魅力と言えれば自然と答える人が多いことが分かる。また、大野の魅力については回答から「自然」と回答した高校生は 56%と一番多いことが分かった。アンケートで得られた内容とヒアリングによって得られた内容が同じであることが分かった。

Q3, 4, 6 から高校生が何人か集まってコミュニケーションが取れる場所や知識が得られる場所(1例:勉強場所)を作ることによって思い出を作ってもらい、その場所に愛着を持ち、大野への愛着に繋がっていきけるのではないかと考えられる。また、このような機会や場所を提供することが重要であると考えられる。

第7章 まとめ

7.1 結論

本研究では、大野市において、地元から定住・転出の転機となる高校生の地域愛着の醸成において生活環境に応じたより効果的な方法を検討するため、大野高校生にアンケート調査やヒアリングを行い、効果的な方法について考察した。

仮説① 地域資源接触の度合いや地域愛着は「わたしが未来の市長プロジェクト」からの直接性によって異なる。

地域資源接触の度合いが2学年で異なった。特に学生生活において現在高校1年生の方が現在高校3年生の方より1.33 地域接触度合いが高いことが分かった。理由として、現在高校1年生は「わたしが未来の市長プロジェクト」という地域資源との接触が多い授業があることからこれが原因で学生生活での接触量が高くなったと考えられる。

地域愛着の度合いが2学年で異なった。特に、地域に対する「選好」においてのみ、現在高校1年生の方が現在高校3年生より0.34 高いことが分かった。「わたしが未来の市長プロジェクト」は地域愛着醸成において初めの段階では効果的である一方で、高校2,3年生においても地域資源と接触できるような継続的な活動が必要であると考えられる。

仮説② 地域について考える度合いに応じて地域愛着や地域資源とのかかわり方が異なる。

地域について考える度合いを高校生アンケートの「わたしが未来の市長プロジェクト」の質問項目の1つである「大野市のことについて考えるきっかけになった」は5件法を用いて高校生に回答してもらったが今回は「とてもそう思う。」、「そう思う。」、「どちらでもない等。」の3つに分け、分析を行った。

地域資源接触や地域愛着の度合いが地域について考える度合いによって異なることが分かった。各地域について考える度合では3つの地域愛着や4つの地域資源との接触の仕方の間では基本的には大きな差はなかった。しかし、アンケートで「とてもそう思う」と回答した高校生と、「どちらでもない等」と回答した高校生を比較すると、地域愛着の度合いと接触量の度合いどちらも「とてもそう思う」と回答した地域について考える度合いが高い高校生の方が、「どちらでもない等」と回答したその度合いが低い高校生より1.00 程度それぞれ高いことが分かった。これにより地域愛着を醸成するにあたって、地域について考えるきっかけづくりが重要であるということが出来る。

仮説③ 学生に対して一方的に聞く(アンケート)より対話の中で聞く(ヒアリング)の方が、地域魅力の理由を知ることができる。

アンケート分析の結果から大野の魅力については回答から「自然」と回答した高校生は56%と一番多いことが分かった。また、高校生へのヒアリングでは、実際に目につくものや偉人に関するものなどの歴史やシンボル性が市長に提案するうえで重要だと思っているが、大野の魅力と言えば自

然と答える人が多いということが分かった。アンケートで得られた内容とヒアリングによって得られた内容が同じであることが分かった。

高校生へのヒアリングから、高校生が何人か集まってコミュニケーションが取れる場所や知識が得られるような場所（例：勉強場所）を作ることで思い出を作ってもらい、その場所に愛着を持ち、大野への愛着に繋げていけるのではないかと考えられる。また、このような機会や場所の提供が重要であると考えられる。

7.2 今後の方針

本研究では、高校生のアンケート分析やヒアリングによって高校生が地域について愛着の醸成の仕方や地域について考えることにおいて必要だと思っていることが分かったが、サンプル数が少ないということや高校生が要求していることを実際に行えていないことから以下のことが今後必要であると考えられる。

- ① 地域愛着の醸成において高校生の要求に答え、その場所や機会に愛着を持ってもらうことが効果的な方法の 1 つである。ただし、既に高校の現場やいくつかの公共空間で場所や機会があり、それとは異なる場所と機会を明確にしなが、実際に構築して、その効果を検証することが重要である。
- ② 「わたしが未来の市長プロジェクト」は地域愛着醸成において初めの段階では効果的ではあるが、継続して地域資源と接触する機会が必要であることが示された。高校生の提案のいくつかを実際に実現していきながら、その効果を高校生自身に体験してもらい、継続して地域資源と接触できることの意義を確かめていくことが求められる。

謝辞

本研究にご協力頂いた大野高等学校の教職員の皆さま、および大野市出身の高校 1 年生に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 定住自立圏構想研究会:定住自立圏構想研究会報告書 ～住みたいまちで暮らせる日本を～, 総務省, 2008.
- 2) 李永俊, 杉浦裕晃:地元回帰の決定要因とその促進策 -青森県弘前市の事例から-, 財務省 財務総合政策研究所「フィナンシャル・レビュー」, 平成 29 年第 3 号(通巻第 131 号), pp. 123-143, 2017.
- 3) 辰野町:移住定住に関する意識調査・アンケート集計結果, 2017.
- 4) Hidalgo, M. and Hernandez, B.: Place attachment: conceptual and empirical questions, *Journal of Environmental Psychology*, Vol. 21, pp. 273-281, 2001.
- 5) 武 基雄, 竹内寿一, 松井俊一:愛着性と定住性の研究:3-定住性の概念構成:都市計画, 日本建築学会学術講演梗概集, 計画系, pp. 2015-2016, 1982.
- 6) 武 基雄, 竹内寿一, 松井俊一:愛着性と定住性の研究:1-愛着性:都市計画, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 計画系, pp. 2011-2012, 1982.
- 7) 澤本凱智:地域資源接触と地域愛着からみた高校生の定住意識醸成のための関係性分析 -福井県大野市において-, 関西大学卒業論文, 2020.
- 8) 大野市公式ホームページ:<<https://www.city.ono.fukui.jp/>>2022 年 1 月閲覧
- 9) Brown, G., Brown, B. and Perkins, D.: New housing as neighborhood revitalization -place attachment and confidence among residents-, *Environmental and Behavior*, Vol. 36, No. 6, pp.749-775, 2004.
- 10) Brown, B., Perkins, D. and Brown, G.: Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis, *Journal of Environmental Psychology*, Vol. 23, pp. 259-271, 2003.
- 11) 菊澤育代, 近藤加代子:幸福度が定住意向に与える影響に関する研究 宗像市日の里地区を事例に, 日本建築学会計画系論文集, 第 84 巻, 第 755 号, pp.129-136, 2019.